

## (2) 外国人居留地の形成と多彩な異国文化にみる歴史的風致

### ア 概要

外国人居留地は、安政6年(1859)の開港時より少し遅れ、翌年の万延元年(1860)に運上所を境に日本人居住地と外国人居留地(山下町の一部)が設置され、順次拡大していった。慶応3年(1867)には山手地区が居留地に編入し、横浜の居留地は明治32年(1899)に居留地制度が廃止されるまで約40年間存続した。山下(関内)居留地は商工業地区として外国の商館が建ち並び、山手居留地は山下居留地で働く居留外国人の住宅地として発展し、それぞれ特色のある街並みが形成された。

現在の山手地区の道路や地割などの基本的な骨格は、山手居留地として整備された明治期からほとんど変わっていない。しかし、明治期に建設された建物は、大正12年(1923)の関東大震災で壊滅的な被害を受けた。現在は、関東大震災後に建設された西洋館が現代まで相当数現存し、山手の景観を形成している。居留地時代に持ち込まれたバラやヒマラヤスギなどは、山手地区のさまざまな場所で目にすることができる。戦後は長く接収され、復興やまちづくりの遅れなどに大きな影響を受けた。接収解除や環境・景観保全に関する地域住民によるまちづくりが続けられ、歴史的風致を感じることのできる景観や環境、西洋館などの歴史的建造物が残されてきた。

また、居留外国人がもたらしたさまざまな文化の一つに、スポーツがある。明治3年(1870)に開園した日本初の西洋式公園である山手公園では、明治9年(1876)に初めてテニスが行われてから現在までテニスを楽しむ姿を見ることができる。明治9年(1876)に開園した横浜公園では、開園当時よりクリケットや野球などスポーツが盛んに行われてきた。その他、根岸競馬場で行われた近代競馬など、外国人がもたらしたスポーツは、現在にも引き継がれている。

## イ 建造物

### ○山手公園

山手公園は、明治3年（1870）に開園した横浜居留外国人によって造られた日本初の西洋式公園である。明治11年（1878）には、「レディース・ローン・テニス・クロッカー・クラブ」がテニスコートを設けテニスをプレーしたことから、日本における近代テニス発祥の地として知られる。現在でも、テニスコートは市民に利用され、園内にある横浜テニス発祥記念館で歴史を知ることができる。また、イギリス人によって持ち込まれたヒマラヤスギが日本で初めて植えられ、ここから全国に広まったとされる。平成16年（2004）、名勝に指定された。



山手公園

### ○横浜公園

横浜公園は慶応2年（1866）の第3回地所規則により、日本大通りとともにR.H. ブライトンによって設計された西洋式公園で、明治9年（1876）に開園した。山手公園と違い、居留外国人と日本人が共に使える公園であったので「<sup>ひが</sup>彼我公園」と呼ばれた。開園当初は芝生のクリケット場があったが、明治42年（1909）に横浜市所有になった際、新たに野球場や噴水・四阿などが整備された。関東大震災の復興整備では、昭和4年（1929）本格的な野球場や野外音楽堂などが建設され、野球場ではベーブ・ルースやルー・ゲーリックら米国の名選手がプレーしたことで有名である。戦後の接收を経て、返還後は「平和球場」として野球の試合に利用され、昭和53年（1978）に「横浜スタジアム」が建設された。開園当初より、横浜の都市の中心にある公園でありながら、野球を中心としたスポーツの拠点としての機能も果たしてきた。平成19年（2007）、隣接する「日本大通り」とともに登録記念物に登録された。



横浜公園

### ○旧根岸競馬場一等馬見所<sup>うまみじよ</sup>

旧根岸競馬場は第3回地所規則により、日本で最初の近代様式競馬場として開設した。現在残る一等馬見所は、関東大震災後にJ.H. モーガンが設計して新しく建設されたスタンドで、『東京横浜復興建築図集1923-1930』（建築學會編、昭和6年（1931））に「日本レース倶楽部」として写真と配置図が掲載されており、それによると一等馬見所は昭和4年（1929）竣工、翌年、二等馬見所が竣工したことがわかる。昭和63年（1988）には、二等馬見所が解体されている。昭和4年から17年（1942）まで競馬場としてレースが開催されていたが、日本海軍による接收、戦後は米軍による接收があったため、現在まで一般に立ち入りできない状況が続いている。しか



旧根岸競馬場一等馬見所



し、高台に建つ三つの塔を持つ特徴的な外観は、遠くからもみることができ、根岸のランドマークとなっている。周辺のレース場があった場所は地形を生かした緑豊かな公園となり、馬の博物館やポニーセンターが隣接するなど、競馬場であった当時の様相を今に伝えている。

#### ○外交官の家（旧内田家住宅）

外交官の家は、明治から大正にかけて活躍した外交官の内田定槌<sup>さだつち</sup>の住宅として明治43年（1910）に建てられ、平成9年（1997）に渋谷区南平台から現在地のイタリア山庭園に移築された建物である。室内は家具などの調度類が再現され、当時の様相を体験できるようになっている。「花と器のハーモニー」をはじめとした季節ごとのイベントや、ボランティア活動による清掃活動などにより、地域や来街者との交流の場となっている。平成9年（1997）、重要文化財に指定された。



外交官の家

#### ○山手資料館（旧中澤邸）

山手資料館は、明治42年（1909）に建てられた和洋折衷住宅の洋館部分で、二度の移築を経て昭和52年（1977）に現在地に移築再建された。横浜山手に関する資料を展示する民間の「山手資料館」として活用され、山手地区のシンボルとして多くの人に親しまれている。平成11年（1999）、市認定歴史的建造物に認定された。



山手資料館

#### ○山手 234 番館

山手 234 番館は、昭和2年（1927）頃に建てられた外国人向けアパートである。平成元年（1989）、歴史的景観保全を目的として市が取得し、平成9年（1997）に深刻な老朽化を受けて大規模な改修工事の実施が決定するとともに、「中区パートナーシップ推進モデル事業」の一環として活用方法が検討された。翌年、地域住民や一般公募で選ばれた市民で構成する「山手 234 番館活用検討会」が発足し、ワークショップや街歩きなどをしながら、活用方法の検討が行われた。平成12年（2000）、市認定歴史的建造物に認定されるとともに一般公開された。



山手 234 番館

## ウ 市街地環境

横浜開港により、外国人居留地が形成された。外国商館や外国資本の銀行などが建ち並ぶ山下居留地と、山下居留地（山下地区）で働く居留外国人が暮らす住宅地としての山手居留地（山手地区）として発展した。横浜は大正12年（1923）の関東大震災で壊滅的な被害を受けたため、震災前の遺構は数少ないものの、山下地区では外国商館だった旧横浜居留地48番館や旧英国7番館、外国資本銀行であった旧露亜銀行横浜支店などが居留地時代の遺構を見ることができる。

一方、山手地区では震災復興期の建物が残っているが、外国人向け市営復興住宅として建てられた山手89-8番館や民間による外国人向けの復興住宅として建てられた山手69-6番館など震災復興を物語る西洋館も残っている。また、居留外国人により設立した横浜協立学園などの学校、カトリック山手教会や横浜山手聖公会などの教会、外国人墓地等なども震災復興を経て現在まで引き継がれ、文教地区としての環境が山手地区の街並みの特徴ともなっている。

これらの市街地環境を構成する主な歴史的建造物は以下のとおり。

対象の歴史的建造物	指定等
カトリック山手教会聖堂	市認定歴史的建造物
横浜山手聖公会	市認定歴史的建造物
石橋邸	市認定歴史的建造物
松原邸	市認定歴史的建造物
宇田川邸	市認定歴史的建造物
BEATTY邸（ビーティ邸）	市認定歴史的建造物
エリスマン邸	市認定歴史的建造物
ブラフ18番館	市認定歴史的建造物
カトリック横浜司教館別館	市認定歴史的建造物
カトリック横浜司教館（旧相馬永胤邸）	市認定歴史的建造物
岡田邸	市認定歴史的建造物
山手資料館	市認定歴史的建造物
山手234番館	市認定歴史的建造物
ベーリック・ホール	市認定歴史的建造物
山手76番館	市認定歴史的建造物
打越橋	市認定歴史的建造物
桜道橋	市認定歴史的建造物
山手89-8番館	市認定歴史的建造物
フェリス女学院10号館（旧ライジングサン石油会社社宅）	市認定歴史的建造物
フェリス女学院6号館別館	市認定歴史的建造物
河合邸	市認定歴史的建造物
山手26番館	市認定歴史的建造物
霞橋（旧江ヶ崎跨線橋）	市認定歴史的建造物
山手133番館	市認定歴史的建造物
山手133番ブラフ積擁壁	市認定歴史的建造物
山手237番館	市認定歴史的建造物
横浜共立学園本校舎	市指定有形文化財
横浜地方気象台庁舎	市指定有形文化財
横浜市イギリス館	市指定有形文化財
山手214番館	市指定有形文化財
山手111番館（旧ラフィン邸）	市指定有形文化財
岩田家住宅	市指定有形文化財
ジェラルド水屋敷地下貯水槽	国登録有形文化財

## エ 活動

### ○居留地を感じる山手のまちづくり

横浜港開港以降、居留外国人の住宅地として形成した山手地区は、西洋の住宅や教会、学校などが建てられて街が形成されていくとともに、さまざまな西洋の植物も持ち込まれた。イギリス人のカール・クラマーは、西洋の「バラ」を初めて日本に持ち込み、山手公園が開園した翌年の明治4年（1871）に開催したフラワーショーでバラを販売したことで山手の居留地住宅の庭から市民の庭へと広まっていった。また、明治12年（1879）には、イギリス人のヘンリー・ブルックにより、山手公園の一带に「ヒマラヤスギ」が初めて植えられ、明治末頃から市内の教会や学校に植えられて広まっていった。山手に持ち込まれた「バラ」や「ヒマラヤスギ」は、現在でも山手地区のさまざまな場所で見ることができ、地域住民や来街者を楽しませている。

関東大震災で山手地区一帯は壊滅的な被害に遭ってしまったが、居留外国人によって持ち込まれた西洋館とその前に整えられた庭、花や樹木による豊かな緑の環境は、震災や戦災の復興を経て地域の手により現在まで守られている。山手公園や元町公園などでは、昭和36年（1961）に全国に先駆けて創設された公園愛護会制度により、地域住民によって設立された公園愛護会と地域の学校等との協働で清掃・除草、草花の手入れなどが行われている姿を見ることができる。また、平成4年（1992）に発足した「山手まちづくり懇談会」では、市民まちづくりフォーラムの開催や住民ワークショップ、山手234番館の市民運営実験などさまざまなまちづくり活動を行った。特に、山手234番館の市民ボランティアでは、歩いて楽しめるようなガーデニング「チューリップアートプロムナード」と題して近隣の元町商店街とともにチューリップの花絵を飾るイベント、山手の景観調査、昭和60年（1985）の調査を基にした景観木の毎木調査、緑と歴史などを調査してまとめる活動なども行った。山手234番館が指定管理者制度に移行した平成14年（2002）からは、運営管理から離れてしまっても山手らしい行事を続けたいという意向から「山手西洋館ボランティアネットワーク」を発足して活動を継続し、山手234番館の花壇や周辺道路沿いの花壇の管理をしている姿や、公開西洋館における季節ごとのイベントへの参加などで活動の様子を見ることができる。

8つの公開西洋館では、ボランティアによる庭の手入れや、地域の町内会・自治会やボランティア団体等と協働で季節ごとにイベントを実施している。毎年恒例となっている初夏の「花と器の



山手外国人住宅〔彩色写真〕  
（明治中期、横浜開港資料館蔵）



山手公園のヒマラヤスギ  
（手前は横浜山手テニス発祥記念館）



山手234番館市民運営実験  
（平成10年（1998））



花と器のハーモニー



ハーモニー」や秋のハロウィン、冬の山手芸術祭など、西洋館ならではのおもてなしで来館者を楽しませている。

さらに、山手地区では山手や居留地の歴史を紐解き伝える市民活動も盛んである。昭和56年(1981)には市民団体「横浜の洋館を愛する会」が立ち上がり、昭和63年(1988)に「ヨコハマ洋館探偵団」と名を変え、継続してまち歩きと講座・ウォッチング等で山手の魅力を伝えてきた。この活動から得た横浜の魅力等を地域に伝えるため、平成4年(1992)には横浜シティガイド協会が立ち上がり、市民・来街者等へのガイド等で山手などの横浜の魅力を案内して参加者を楽しませている。近年ではNPO法人横浜アーカイブスにより、居留地時代からの地番ごとの情報の蓄積など、山手に関する貴重な資料の研究とデータベース化が進むと共に、公開西洋館等での展示や講座等が行われている。



ブラフアーカイブス HP

一方で、戦後の山手地区のまちづくりはさまざまな問題に地域で乗り越えてきた。第二次世界大戦・横浜大空襲の後、横浜市内各地では米軍による接收を受けたが、この長期化による復興の遅れから、山手地区でも大きな影響を受けており、昭和37年(1962)、山手地区の地主90人によって「山手地区接收解除促進協議会」が結成される。この動きが、山手地区における地域住民のまちづくり活動の最初期にあたる。昭和40年代に入ると、地区内に中高層マンションが相次いで建設され、地域住民による建設反対陳情を始めとしたまちづくり活動が活発化していった。それらの活動を受けて、山手地区の接收が全面解除となった昭和47年(1972)に「山手地区景観風致保全要綱」が制定され、開発及び建築行為に際して建築物等の高さの制限、基準点からの見通し景観の確保、樹木等の適切な管理等について指導を行い、秩序あるまちづくり誘導が始まった。本格的なまちづくりが進むのは、戦後30年近く経ったこの時期からであった。

昭和63年(1988)、横浜市が港の見える丘公園に地下駐車場建設を計画した際には、地域住民から反対運動が起こった。地域住民の反対運動を受けて市の地下駐車場計画は白紙に戻されたが、この問題を受けて、平成4年(1992)に、町民有志により「山手まちづくり協議会」、官民意見交換の場として「山手まちづくり懇談会」が発足した。

平成10年(1998)には、地域住民や地区内の学校等が協力し、優れた環境と歴史的遺産・遺構を活かした魅力あるまちづくりを進めるための目標を定めた「山手まちづくり憲章」が山手まちづくり懇談会の場で住民から提唱され、制定された。しかし平成13年(2001)、前年に廃校となったセントジョセフ・インターナショナル・カレッジの跡地に大規模マンションが建設されることが発表された。このときも反対運動や署名運動などが展開され、これを契機に、山手東部町内会・西部自治会により「山手まちづくり推進会議」が発足した。山手まちづくり推進会議では、平成16年(2004)に住居発意型の地区計画の策定と住民の意思により「山手まちづくり協定」を策定して運用を開始、平成18年(2006)には山手地区のヒマラヤ杉等の景観木調査、平成19年(2007)には「山手まちづくりプラン」の策定とブラフ積擁壁の分布調査など、山手地区の景観や環境を守るための活動を行ってきた。これらの協定やプランを継承する形で、令和元年(2019)に山手地区景観計画及び山手地区都市景観協議地区の指定に至っている。



これらのまちづくり活動と同時に、マンション開発等で西洋館や近代建築が失われていく歴史的建造物の保全活用も民間主導で始まり、官民協働で進められてきた。その皮切りとなったのが昭和 51 年（1976）の民間事業による山手資料館の移築保全である。近年でも山手 133 番館が市内企業の手によって、取得及び保全・改修され、貴重な西洋館が残された。一方、横浜市でも昭和 40 年代より西洋館等の取得・保全と公園化、公園内への移築保全などを進め、現在では公園内に 8 つの公開西洋館として市民や来街者を迎えている。

以上のように、地域住民が行政を巻き込みながらまちづくりや歴史的建造物の保全活用の活動により、山手地区の異国情緒を感じる歴史的な景観や環境、西洋館や近代建築といった歴史的建造物を今日まで守ってきたのである。



横浜市イギリス館

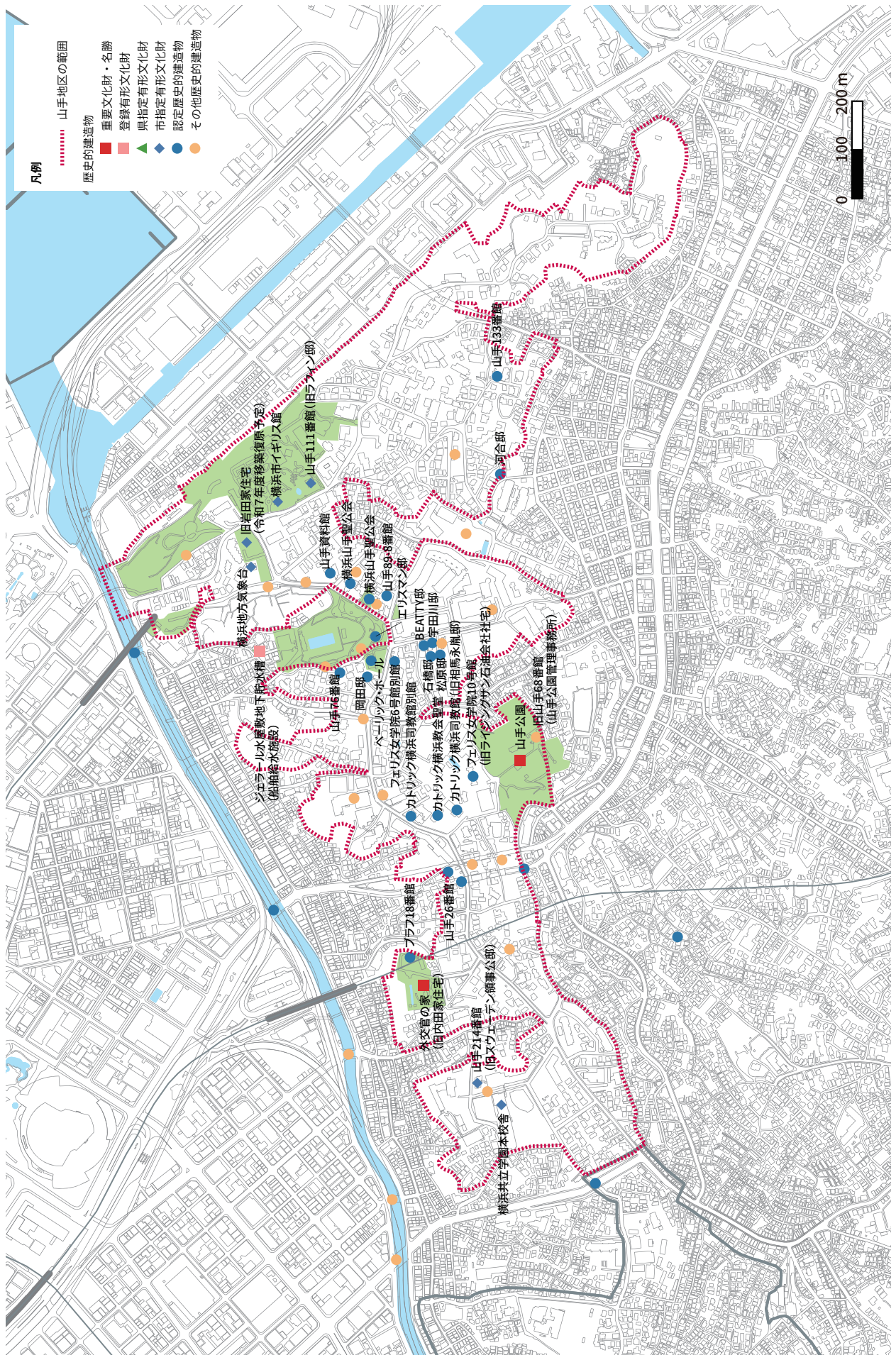


エリスマン邸

山手地区のまちづくり活動年表

出来事	明治 4 年 (1871)	大正 12 年 (1923)	昭和 20 年 (1945)	昭和 47 年 (1972)	平成 14 年 (2002)
		フラワーショー (バラ販売)	関東大震災	終戦・接收	全面接收解除
明治 12 年 (1879)	ヒマラヤスギ植樹				
居留外国人等によるガーデニング	バラ・ヒマラヤスギ等ガーデニング				
公園愛護会等の花と緑の活動	清掃・草花の手入れ等の活動				
地域の環境保全・まちづくり活動	接收解除促進活動 環境保全活動 景観保全・まちづくり活動				
公開西洋館によるおもてなし	西洋館の市民運営実験等 西洋館の公開とおもてなし				







## ○スポーツ文化のひろがり

開港以降、居留外国人の生活文化のひとつとしてさまざまな西洋のスポーツがもたらされた横浜は、近代スポーツ発祥の地となった。そのおもな舞台となったのが、山手公園（名勝）と横浜公園（登録記念物）である。

居留外国人が自らの資金で整地と植樹をおこなって明治3年（1870）に開園した山手公園では、軍楽隊による演奏会やフラワーショーなどの社交イベントが催される一方で、当時女性の間で人気が高まっていたローン・テニスが盛んにおこなわれていた。今日のテニスとは違って、一つの箱にラケットとネットとボールを収めて持ち運べるローン・テニスは、芝生があればどこでも楽しむことができた。明治9年（1876）6月17日の『ジャパン・ウィークリー・メール』には、山手公園でのローン・テニスの試合の様子が描かれており、これが横浜における最初のテニスの記録である。そして2年後の明治11年（1878）7月、居留民たちによる山手公園の維持管理が困難になると、公園はレディース・ローン・テニス&クロッカー・クラブ（LLT&CC）に貸与されることになり、専用の5面コートをもった日本最初のテニスクラブが正式に発足した。

当時のクラブ役員はすべて既婚の婦人で、横浜におけるテニス普及の中心的な役割を担っていたのは女性たちであった。また山手公園以外にも、宣教師たちが創設したミッションスクールや、居留民たちが住む洋館の庭でもテニスが興じられるようになり、横浜の外国人社会を通じて、広くテニスが普及していった。テニスコートにまつわるエピソードでは、関東大震災の際に、火災に追われてイギリス海軍病院の敷地（現在の港の見える丘公園）に集まった人々が、テニスコートのネットをロープ代わりにして崖をくだり、新山下の埋め立て地へと逃れたことが知られている。

山手公園のテニスコートは、明治32年（1899）の居留地撤廃以降も、条件付きながらLLT&CCが使用を続けてきたが、震災後の昭和2年（1927）には公園の西側半分が横浜市管理となり、東側半分は、引き続きLLT&CCによって外国人専用のテニスコートとして使用された。戦後は占領軍によってテニスコートも接収されるが、昭和27年（1952）に接収が解除されると、LLT&CCは活動を再開させる。その後、昭和39年（1964）には、クラブの名称を横浜インターナショナル・テニス・クラブに変更して、日本人会員も含めた組織となり、昭和57年（1982）には、現在の横浜インターナショナル・テニス・コミュニティ（YITC）となった。

昭和53年（1978）には、LLT&CCの創設100周年を記念して、山手公園内に「日本庭球発祥之地」の碑が設置され、また平成10年（1998）には、創設120周年を記念して「横浜山手・テニス発祥記念館」が建設された。YITCは、現在も活発に活動をおこなっており、山手公園ではテニスボールが飛び交う軽快な音がいつも響いている。



開園間もない山手公園  
（横浜開港資料館蔵）



山手公園のテニスコート

山手公園について完成した洋風公園である横浜公園は、慶応2年（1866）の横浜大火をきっかけに誕生した。大火後、幕府と諸外国との間で交わされた「横浜居留地改造及競馬場墓地等約書」にもとづき、

イギリス人技師ブラントンの設計で明治9年（1876）に開園した横浜公園では、公園中央に設けられた芝生のグラウンドが、クリケットをはじめフィールド・スポーツの舞台であった。

クリケットは横浜で最初におこなわれた球技であり、文久3年（1863）に当時まだ空き地だった旧埋立居留地で、イギリス軍艦の乗組員と居留民がクリケットの試合を楽しんだことが知られている。明治元年（1868）には横浜クリケット・クラブ（YCC）が結成され、のちに新埋立居留地と呼ばれる造成地にグラウンド（通称スワンプ・グラウンド）を整備して、試合をおこなっていた。YCCは横浜公園の計画を絶好の機会と捉えて、日本政府による整備を待たずに、芝生を植えたり平屋建てのクラブ・ハウスを建てるなどの行動に出ていたが、開園後、公園管理者が神奈川県に決定した明治11年（1878）以降、公園中央のクリケット・グラウンドを貸与されることになった。

この芝生のグラウンドは、そのほか陸上競技の横浜アマチュア・アスレチック・アソシエーション（YAAA）、横浜フット・ボール・アソシエーション（YFBA）、横浜ベース・ボール・クラブ（YBBC）も使用するようになり、明治17年（1884）には、YCCを核として、これらの競技団体がひとつになって、横浜クリケット&アスレチック・クラブ（YC&AC）が結成された。明治20年代後半以降、YC&ACは会員数が200人を超え、横浜の外国人社会において最大規模のスポーツ団体となった。



横浜公園内のグラウンド  
（横浜開港資料館蔵）

明治32年（1899）に居留地制度が撤廃されると、クリケット・グラウンド以外の公園管理は神奈川県から横浜市へと移り、さらに明治42年（1909）12月には、公園全域が横浜市の管理となった。これによってYC&ACは横浜公園から撤退することになり、あらたに根岸の高台（現在の中区矢口台）へと移転した。移転にあわせて、クラブの名称も横浜カントリー&アスレチック・クラブ（YC&AC）と改称され、クリケット以外にも広く野外スポーツを取り扱う組織となり、現在に至っている。

横浜市はYC&ACの移転を機会に横浜公園の改造に着手すると、中央のグラウンドを花園橋寄りの公園南東隅に移して野球場とした。横浜公園ではクリケット以外にも、野球やフットボール、ラグビーなどさまざまなスポーツがおこなわれていたが、最初の野球の試合がおこなわれたのは明治4年（1871）のことで、YCCが整備したスワンプ・グラウンドで、アメリカ軍艦の水兵と居留民との間でおこなわれた。その後、横浜公園グラウンドでも野球の試合がおこなわれるようになり、明治9年（1876）の横浜ベース・ボール・クラブ（YBBC）結成につながっていく。横浜公園グラウンドは、東京の一高（第一高等学校）とYC&ACとの間の対抗戦など、野球の国際試合の舞台になっていった。

震災後の昭和4年（1929）には、横浜公園球場が完成した。球場では、横浜専門学校（現在の神奈川大学）と横浜商業専門学校（現在の横浜市立大学商学部）との定期戦がおこなわれるなど、数々の名物試合の舞台となった。昭和9年（1934）11月には、アメリカ大リーグの選手が来日して日米野球が開催され、球場はベーブ・ルースやルー・ゲーリッグらメジャーリーガーの活躍に沸いた。



横浜公園球場  
（横浜市中央図書館蔵）

戦後は接収を受けて米軍専用の球場となり、名選手の名前にちなんで「ゲーリック球場」と呼ばれるようになった。昭和21年（1946）7月には横浜貿易復興野球大会が開かれるなど、日本人



による大会も早くから開催されており、昭和 24 年（1949）10 月には日米親善野球大会も行われている。昭和 27 年（1952）に接収が解除されると、ゲーリック球場は当時の平沼亮三市長の命名により「平和球場」と改称された。昭和 50 年代に入ると、プロ野球球団の誘致とともに新しいスタジアムの計画が進められ、昭和 53 年（1978）3 月、横浜大洋ホエールズ（当時）のホームスタジアムとして、現在の横浜スタジアムが完成した。都市の中心に誕生したスタジアムは、現在も横浜 DeNA ベイスターズの本拠地として、日々熱い盛り上がりを見せている。



横浜公園と横浜スタジアム

開港後、もっとも早く開催されたスポーツは競馬である。開港翌年の万延元年（1860）には、現在の元町に半マイルの馬蹄形のコースが設けられて、西洋人による日本で最初の競馬会が開催された。続いて文久 2 年（1862）には、埋立てによって居留地に編入されたばかりの旧横浜新田（現在の中華街一帯）で、春と秋の 2 回、競馬会が開催されている。

その後、元治元年（1864）に幕府が諸外国と締結した「横浜居留地覚書」の第一条に、外国人のための競馬場を設置すべき旨の条項が盛り込まれると、最終的に根岸の高台に競馬場が完成した。スタンドを設計したのは、横浜税関の改修工事（現在の象の鼻防波堤）などを手がけたイギリス人技師ウィットフィールド&ドーソンで、慶応 2 年 12 月（1867 年 1 月）に、日本最初の本格的な洋式競馬場で、最初の競馬会が開催された。

これと並行して、慶応 2 年（1866）5 月には、競馬の運営を担う横浜レース・クラブが設立された。同クラブはイギリス人中心であったため、日本人にも門戸を開いた多国籍の横浜レーシング・アソシエーションが結成されるが、明治 11 年（1878）2 月に両者が統合されて、横浜ジョッキー・クラブが誕生した。さらに明治 13 年（1880）4 月には、競馬場の管理権が日本政府に回収されると、日本レース・クラブ（日本名：日本競馬会社）があらたに組織された。日本側では皇族や政府高官が会員となっており、同年 6 月、このクラブ最初の競馬会が開催され、このとき明治天皇から賞品が寄贈されたことが、現在の天皇賞のルーツとなった。



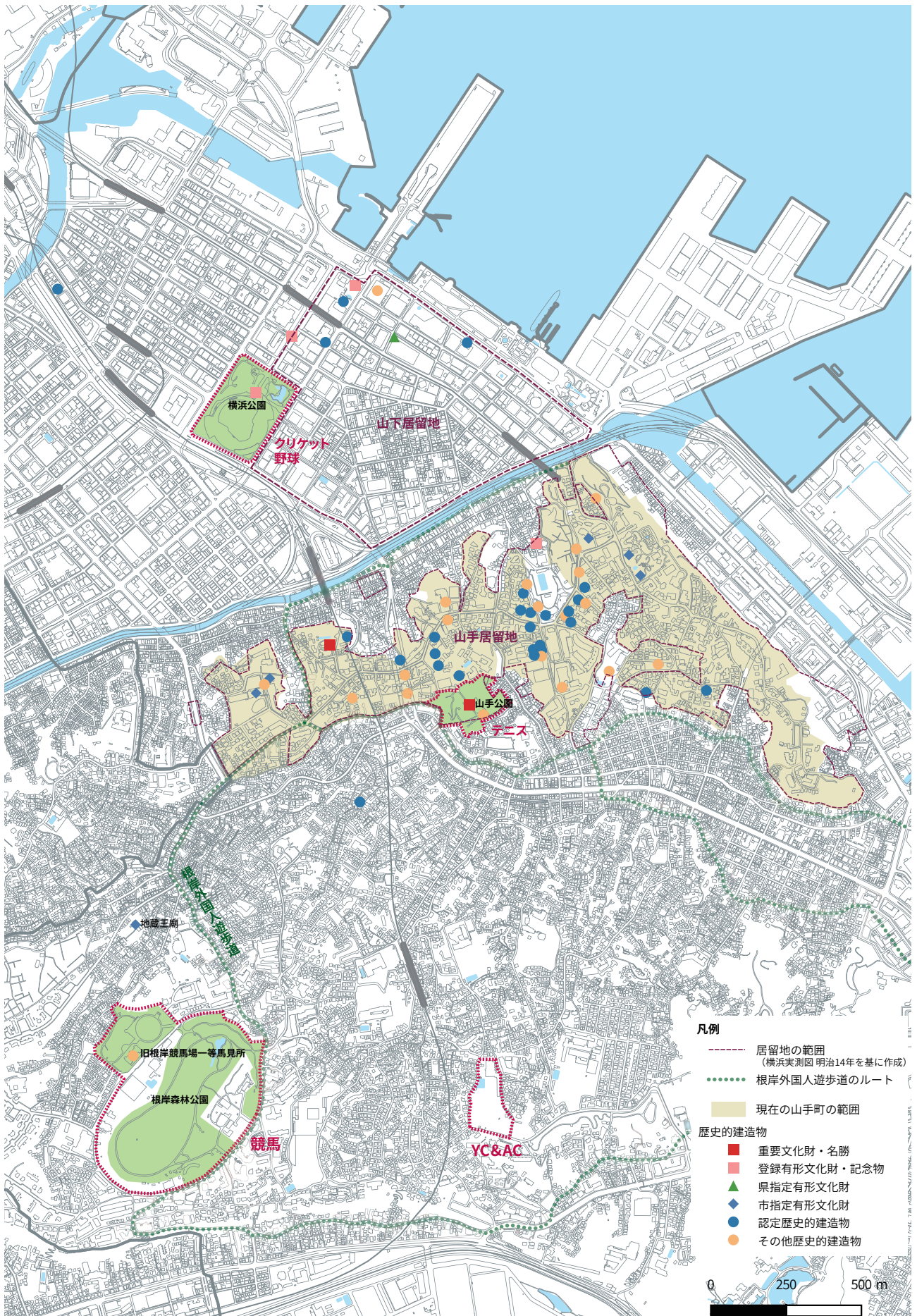
明治中頃の根岸競馬場  
（横浜開港資料館蔵）

根岸競馬場に建設されたスタンドは関東大震災で被災するが、アメリカ人建築家 J.H. モーガンの設計で、2 棟の馬見所を含む競馬場施設が再建された。戦後は長きにわたって米軍の接収を受けるが、昭和 44 年（1969）にスタンド以外の土地が返還され、横浜市根岸森林公園と日本中央競馬会の根岸競馬記念公苑として整備された。続いて昭和 52 年（1977）には、競馬記念公苑内に「馬の博物館」がオープンし、現在も横浜と馬・競馬の歴史についての普及事業を展開している。昭和 57 年（1982）にはスタンドが返還され、そのうちの一等馬見所が現存している。



根岸競馬場一等馬見所





外国由来のスポーツに関する場所と居留地の位置図

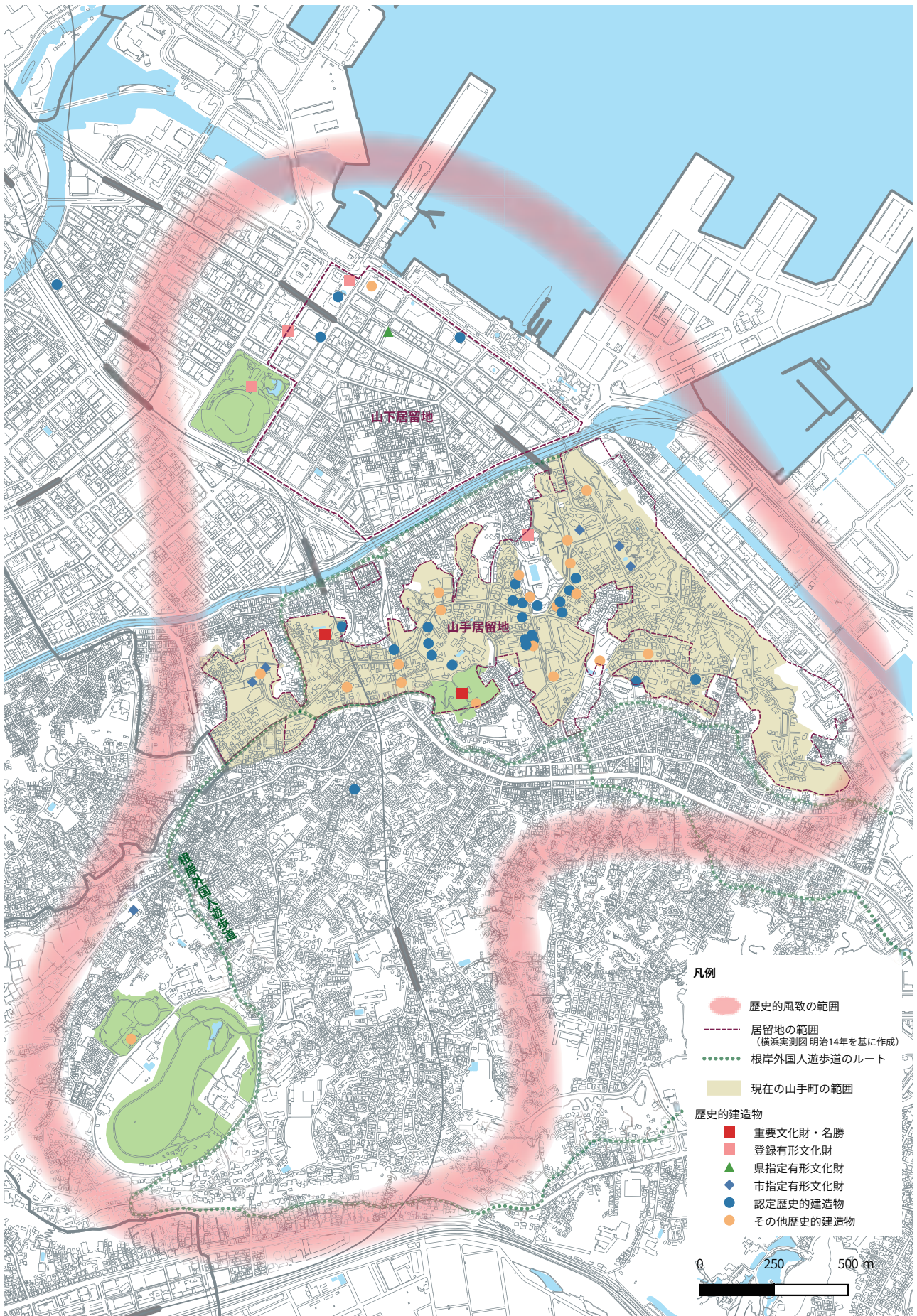
## オまとめ

横浜が開港し、外国人居留地となった山下地区や山手地区では、現在のまちの基本的な骨格が明治期に整備された。

居留外国人の住宅地として形成した山手地区では、外国から持ち込まれたバラやヒマラヤスギといった植物ともにガーデニングがさまざまな形で引き継がれ、手入れの行き届いた植物とその活動を見ることができる。戦後は、接収解除に向けた活動から始まり、環境保全、景観保全などの住民によるまちづくりが展開され、山手地区の異国情緒を感じる環境や景観、歴史的建造物が守られてきた。

居留外国人の生活文化として持ち込まれたさまざまなスポーツは、近代スポーツ発祥の地として知られることになった。山手公園でのテニスや横浜公園での野球などは、明治期から現在まで盛んに活動が継続され、スポーツをしたり観戦したりと、市民を始めとした多くの人を楽しませている。





外国人居留地の形成と多彩な異国文化にみる歴史的風致の範囲



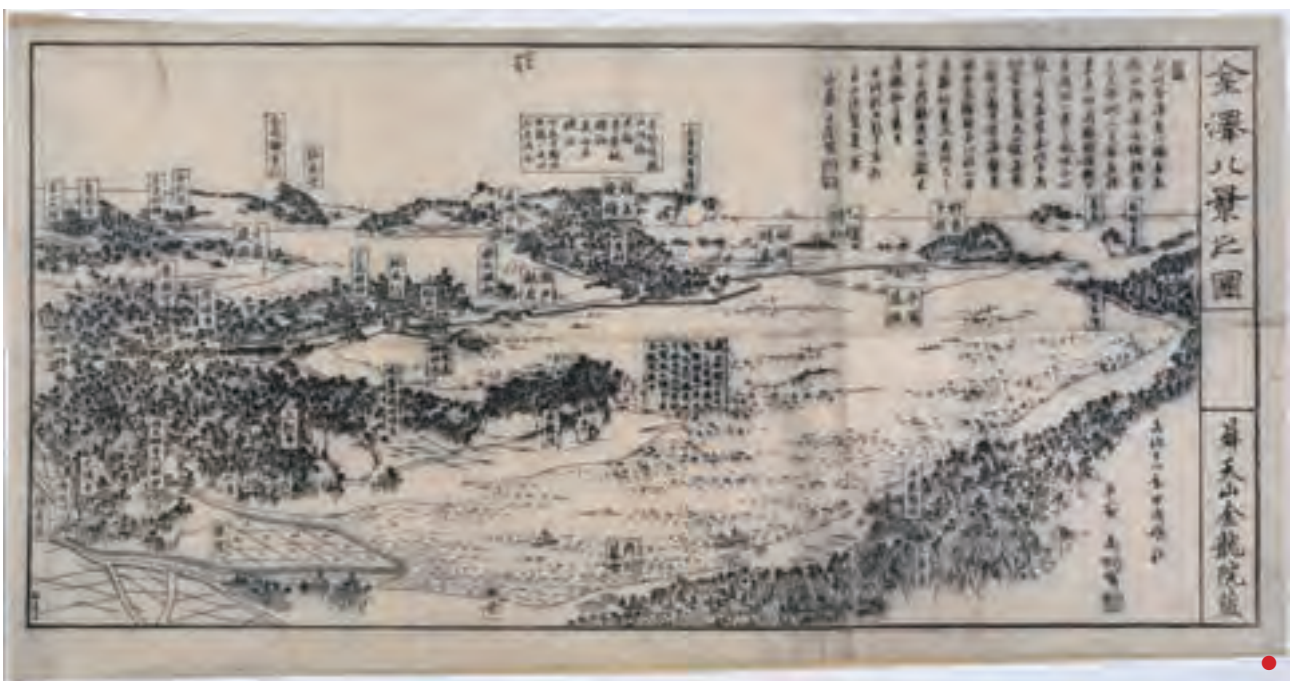
### (3) 六浦湊を発祥とする海との暮らしにみる歴史的風致

#### ア 概要

横浜市南部に位置する金沢は、鎌倉時代に大きく発展した。12世紀末に鎌倉に武家政権が成立し朝夷奈通が開削されると、風浪を防ぐ良港であった六浦湊は鎌倉の外港として栄え、中世都市鎌倉を支える物資の集積地として諸国から商人や職人など多くの人々が集まり大変なにぎわいをみせた。北条実時によって創建された称名寺などを中心として、鎌倉に劣らない仏教文化が栄えた。金沢区内の寺院では、花まつりや稚児行列をはじめとした行事が地域で親しまれている。また、治承四年（1180）に創建した瀬戸神社や建久二年（1191）に創建した富岡八幡宮では、湯立神楽（三ツ目神楽）、祇園船といった中世の頃に始まったとされる神事が今に伝わっている。

幕末から昭和にかけては、金沢八景として浮世絵にも描かれた風光明媚な場所としても知られ、別荘を構える著名人や観光や海水浴等で訪れる人でにぎわった。昭和5年（1930）に湘南電気鉄道（現京急電鉄）が開通すると、富岡の海水浴場などが多くの人でにぎわった。昭和40年代以降の金沢地先埋立により、当時の海岸線は失われてしまったが、富岡八幡宮近くの船溜まりや旧伊藤博文金沢別邸近くの横浜に残る唯一の自然海岸である乙舳海岸に当時の面影を残す。また、横浜市内唯一の海水浴場として海の公園が昭和63年（1988）に開園し、現在でも3月から9月中旬にかけての潮干狩りや夏の海水浴客でにぎわう。

一方、東京湾に面する金沢は、交通や軍事の要衝としての機能も果たした。明治期には長濱検疫所が置かれ、感染症の国内流入を防いでいた。昭和期に入ると、日本海軍の航空隊基地や工廠などが置かれるなど軍事施設が多く立地した。戦後は駐留軍に接收され、近年になって接收解除が進みつつあり、接收解除地は公園などに整備されている。



金沢八景之図（文化11年（1814）、横浜市中央図書館蔵）

## イ 建造物

### ○称名寺境内と建造物

#### ・称名寺境内（史跡）

称名寺は、金沢北条氏一門の菩提寺で、鎌倉幕府二代執権の北条義時の孫である北条実時が居館内に建てた持仏堂を起源とし、13世紀中ごろの建立といわれている。鎌倉時代末期には、浄土式庭園を持つ壮大な伽藍が完成したが、現存する建物はすべて江戸時代の再建である。称名寺の庭園は、南の大門から反橋・中島・平橋を経て金堂に達する形式の浄土式庭園としては時代的に最後の例といえることから、庭園史上における高い価値を有している。また、史跡内には文化財指定された建造物が点在するほか、隣接する神奈川県立金沢文庫には称名寺に伝わる文選集注（国宝）、称名寺聖教・金沢文庫文書（国宝）をはじめ、多くの文化財が所蔵されている。大正11年（1922）に中心区域が「稱名寺内界 附金澤氏墓及開山審海上人以下世代塔」という名称で国指定の史跡に指定され、その後、昭和47年（1972）に周辺区域が追加指定され、指定名称が「称名寺境内」になった。

参道は桜並木で、桜の名所として知られ、境内地の裏にある称名寺市民の森にも桜が300本以上もあるため、花見で多くの市民が訪れる。毎年5月には境内の特設能舞台で「称名寺薪能」が催され、地域の風物詩となっている。また、毎週土曜日にはNPO法人横濱金澤シティガイド協会が園内の案内をしている。

#### ・金堂

金堂は、参道にある惣門と仁王門をくぐり、阿字ヶ池に架かる反橋を渡った正面に位置する。天和3年（1683）に改築されたときされる禅宗様の建物である。金堂に安置されている本尊は「弥勒菩薩立像」で、大正14年（1925）に重要文化財に指定されている。金堂は、平成7年（1995）に県指定重要文化財に指定されている。

#### ・釈迦堂

釈迦堂は、金堂の東側に建ち、文久2年（1862）に建てられた禅宗様の建物である。堂内に安置されていた釈迦如来立像は、大正14年（1925）に重要文化財に指定され、現在は県立金沢文庫に所蔵されている。釈迦堂は、平成15年（2003）に市指定有形文化財に指定されている。

#### ・称名寺塔頭光明院表門

光明院表門は、仁王門手前の参道沿いに建ち、和様を基調に禅宗様を加味した意匠の四脚門である。昭和62年（1987）の解体修理の際、寛文5年（1665）の墨書銘が発見され、現存する称名寺の建築の中では最も古いことが判明した。平成4年（1992）に市指定有形文化財に指定されている。



称名寺境内



称名寺参道



称名寺金堂



称名寺釈迦堂



光明院表門



### ○富岡八幡宮本殿

富岡八幡宮は富岡の小高い丘の上に建ち、金沢地先の埋立までは東側は海に面していた。社伝によれば、建久2年（1191）源頼朝が、鎌倉の鬼門除けとして摂津の西宮神社の恵比寿様を勧請して創建し、のちに安貞元年（1227）には八幡大神を合祀し、社名も八幡宮と改めたとされる。鎌倉時代より800年以上も継承されている「祇園船」や「湯立神楽」の神事が行われている。本殿は丹塗の三間社流造の社殿で、造営は天正14年（1586）、慶長15年（1610）、寛永2年（1625）など10枚の棟札が残るが、現在の社殿造営のものは寛永2年（1625）とみられている。平成14年（2002）には、本殿の屋根を銅板葺から柿葺に復元し、併せて覆殿や拝殿を造営している。また、社殿の北東の斜面に広がる社叢林は、昭和63年（1988）横浜市指定天然記念物に指定されている。



富岡八幡宮

### ○瀬戸神社本殿・拝殿

瀬戸神社は、金沢八景の中心地である瀬戸の内海に面して建つ。社伝によれば、鎌倉に入った源頼朝が日頃崇敬する伊豆三島明神を勧請して、治承4年（1180）に創建したとされる。毎年7月の天王祭の中で行われる「三ツ目神楽（湯立神楽）」は鎌倉時代から伝わる神楽であり、今日まで瀬戸神社の宮司が伝承、奉仕し、地域の夏祭りとして長く親しまれている。現在の社殿は、三間社流造の本殿・幣殿・拝殿を複合した権現造で、棟札より寛政12年（1800）の建立であるとわかっている。また、境内にある大カヤと北側に広がる社叢林は、平成6年（1994）に大カヤ、翌年に社叢林が横浜市指定天然記念物に指定されている。



瀬戸神社

### ○旧伊藤博文金沢別邸

旧伊藤博文金沢別邸は、初代内閣総理大臣・伊藤博文によって明治31年（1898）に建てられた茅葺屋根の海浜別荘である。伊藤博文が風光明媚な金沢の地を好んで建てたといわれ、大正天皇や韓国皇太子なども訪れた。建物がある野島は、歌川広重が描いた金沢八景のうち「野島夕照」として描かれた場所であり、客間棟の座敷からは穏やかな金沢湾の海を望むことができる。明治時代、金沢近辺は東京近郊の海浜別荘地として注目され、内閣総理大臣の松方正義や大蔵大臣等を歴任した井上馨らが別荘を設けた。当時の別荘建築の様相を伝える貴重な遺構である。平成18年（2006）に横浜市指定有形文化財に指定され、平成19年（2007）より解体・修理工事を実施し、平成21年（2009）に竣工・公開した。



旧伊藤博文金沢別邸

### ○金澤園

旗亭「金澤園」は、昭和5年（1930）に開園した、海岸の近傍に建てられた遊園地、割烹旅館である。潮干狩りや海水浴、貸しボート、釣り堀、遊覧船といった海のレジャー、四季折々の花を觀賞できる遊園地や大弓場などのスポーツ施設などを備え、当時のレジャー施設として発展した。建物は昭和4年（1929）に竣工した入母屋造棧瓦葺の木造二階建てで、平成16年（2004）に国の登録有形文化財に登録された。現在は、「カフェ金澤園」として営業されている。



金澤園

### ○旧長濱検疫所一号停留所

一号停留所は、長濱検疫所における上等船客用の停留施設として、明治28年（1895）3月に完成した。建物は、東西に長いコの字型、左右対称の平屋で、当時は、東京湾を見下ろす高台に広い芝庭を前にして建っていた。8つの停留室と食堂及び談話室があり、感染症の疑いがある方々が一定期間滞在していた。横浜最古級の洋風建築として貴重な存在であり、平成30年（2018）に国の登録有形文化財に登録された。今後、建物が建つ横浜検疫所の移転に伴い、海の公園に移築される予定である。



旧長濱検疫所一号停留所

### ○長浜ホール（横浜検疫所長浜措置場旧細菌検査室及び旧事務棟）

横浜検疫所長浜措置場旧細菌検査室及び旧事務棟は、長濱検疫所の施設として明治28年（1895）に建てられた建物であるが、関東大震災で倒壊し翌年の大正13年（1924）に復旧された建物である。旧細菌検査室は、野口英世が半年間検疫医官補として働き、ペスト菌を検出した研究施設として知られ、当時の資料などが展示・公開されている。



長浜ホール（旧細菌検査室）

旧事務所棟は、外観をほぼ復元し、地下に音楽ホールを持つ施設「長浜ホール」として平成9年（1997）に建てられた。

旧細菌検査室及び旧事務所棟は、平成10年（1998）に横浜市認定歴史的建造物に認定されている。



長浜ホール（旧事務所棟）



## ウ 活動

### 1) 海との暮らしを継承する祭礼

#### ○祇園船神事（市指定無形民俗文化財）

祇園船神事は、富岡八幡宮で執り行われる 800 年以上の伝統のある神事であり、横浜を代表する夏の行事である。7 月 15 日前後の日曜に行われる例大祭の日で大祭式に引き続き行われ、青茅の舟に罪穢れを託して沖合遠く流しやるもので、全国各地で 6 月に行われている茅の輪くぐりや夏越の祓の神事と同様、心身共に清々しく祓え清めて暑い夏を迎える昔ながらの行事である。また麦秋の時期でもあり、初穂の麦を海の神にお供えし、五穀の豊饒と海の幸の豊漁に感謝するという要素も一緒になった神事でもある。かつての富岡八幡宮は海岸に近接して建ち、浜が近かったが、現在周辺は遙か沖合まで埋め立てられてしまった。しかし、神社の前の浜は船溜まりの入り海が残され、その浜と外海に通じる水路を通じて執り行われている。

神事に用いられる茅舟<sup>かやふね</sup>は、青茅で作った長さ 70 cm 幅 50 cm ほどの楕円形の舟形を作り、先端は葉先を纏めて首をもたげた形に立てる。茅船の先端部分に大きい御幣を一本立て、周囲の舟べりに一年の月数だけの十二本の御幣を並べ立てる。舟の中央に小麦粒を敷き、その上に大麦粉で作った団子（しとぎ）を三個供える。

当日の朝、社殿にて大祭式が執り行われた後、神前に供えられてお祓いを受けた茅舟は、氏子たち（祇園舟保存会）が肩に乗せ、大勢の参拝客に見送られながら社殿から船溜まりの浜まで運び、浜に安置される。そこで浜降神事<sup>はまおり</sup>が行われ、茅舟の麦の団子（しとぎ）に榊の小さな御幣を刺し、甘酒をかけ、浜降神事の祝詞が奏上される。その後、この茅舟を「八幡丸<sup>はちまん</sup>」と「弥栄丸<sup>いやさか</sup>」という二艘の和舟に移し、雅楽の音色が船溜まりに鳴り響く中、二艘は並んでゆっくりと漕ぎ出し、水路を通過して沖合を目指す。沖合に到着すると茅舟は一年分の罪穢れを託して海に流される。その罪穢れから逃れるべく後ろを振り返らずに、二艘は全速力で競漕しながら船溜まりまで帰っていく。大きな掛け声に合わせて和舟を漕ぐ姿が、祇園船神事のクライマックスとなる。



例大祭  
①古殿地前にて「修祓（しゅばつ）」



例大祭  
②社殿にて「大祭式」



祇園船神事  
③お祓いを受けた茅舟



祇園船神事  
④社殿から船溜まりへ向かう



祇園船神事  
⑤船溜まりへ向かう（公園内）



祇園船神事  
⑥浜に安置された茅舟



祇園船神事  
⑦船溜りにて「浜降神事」



祇園船神事  
⑧「八幡丸」・「弥栄丸」に茅舟をのせて出発



祇園船神事  
⑨沖へ向かう



祇園船神事  
⑩水路を通り船溜まりへ戻る



祇園船神事  
⑪競漕して船溜まりへ戻る



祇園船神事  
⑫船溜まりへ到着し終了



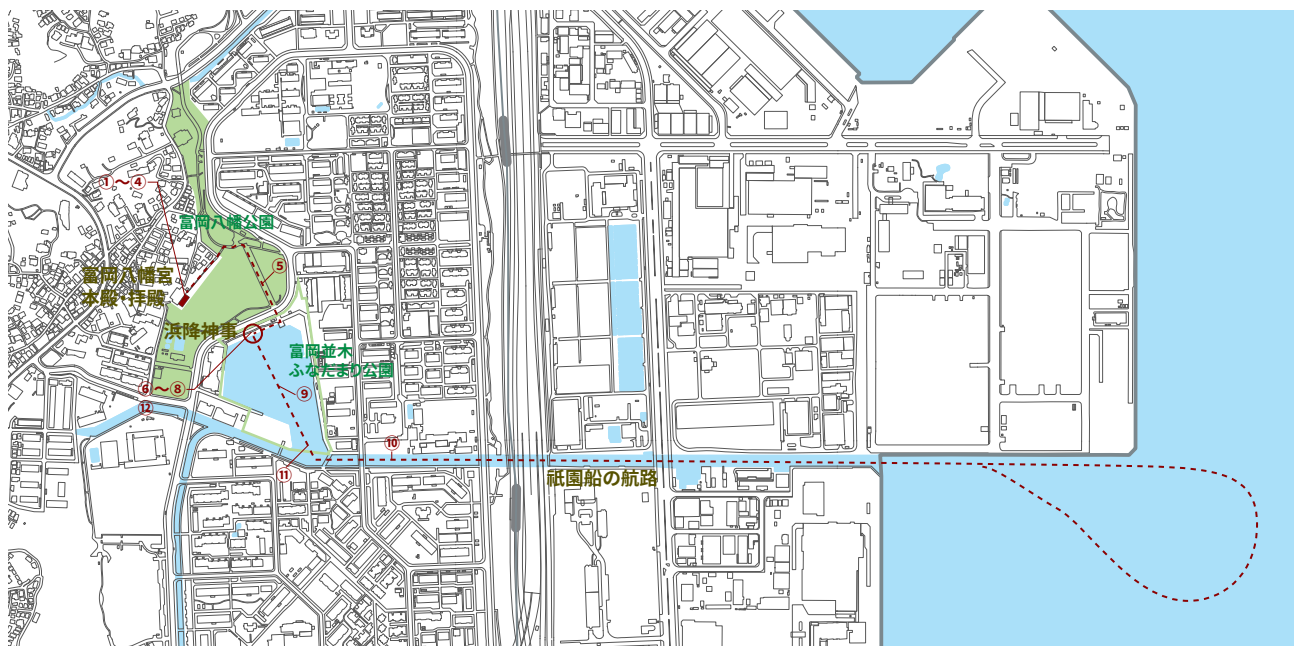
昭和46年(1971)当時の祇園船神事  
(金沢区制70周年記念事業「金澤写真アルバム」より)



昭和46年(1971)当時の祇園船神事  
(金沢区制70周年記念事業「金澤写真アルバム」より)



昭和46年(1971)当時の祇園船神事  
(金沢区制70周年記念事業「金澤写真アルバム」より)



祇園船神事の位置図



○瀬戸神社の天王祭と三ツ目神楽（湯立神楽：市指定無形民俗文化財）

瀬戸神社の夏祭り「天王祭」は八日間にわたり行い、古くは7月7日から14日までの祭事であり、現在はこれに近い日曜日から日曜日の8日間に行われる。天王祭は本来、瀬戸神社の祭礼ではなく、氏子総百姓を中心とする民間行事としての夏祭りであった。六浦町の字瀬戸・六浦・川・大道・三艘の五ヶ町が中心となって行われ、これに併せて瀬ヶ崎、室ノ木、また高谷などでも同様に行われていた。そのため、今でも氏子町内挙げての盛大な祭りとなっている。

初日は、出御祭で神輿にお御霊をお迎えする。それから、三日目の夜に「三ツ目神楽（湯立神楽）」という神楽が行われる。三ツ目神楽は、大きな御釜に熱湯を沸かす湯立を伴う神楽で、「鎌倉神楽」<sup>しよくしやう</sup>「職掌神楽」とも呼ばれる。鎌倉時代に鶴岡八幡宮に奉納されていたものを瀬戸神社が継承している。神職が釜の湯を御幣の串でかき回し吉兆を占い、笹を湯にひたし、参列者に振りかける。この湯を浴びたり飲んだりして、無病息災を祈願するものである。瀬戸神社の三ツ目神楽（湯立神楽）は、平成5年（1993）に市指定無形民俗文化財に指定されている。

三ツ目神楽当日の境内には、地元の子供たちが作ったあんどんに灯がともり、拝殿横には湯立のための山が設けられる。4本の青竹を四方に立て、中央に高い青竹1本を立て、その頂上に五色の幣を垂らした天蓋をつくり、そこから四方に注連縄を張り、五色のシデをつける。山の中央に竈を据え、釜を乗せて湯をたぎらせる。

現在の三ツ目神楽は、境内の神輿庫の前で執り行われ、神楽の演目は①<sup>はのう</sup>羽能 ②お祓い・祝詞 ③<sup>ごへい</sup>御幣招き ④<sup>かきゆ</sup>搔湯 ⑤<sup>いはらい</sup>射祓 ⑥<sup>ゆぐら</sup>湯座 ⑦<sup>けんまい</sup>劔舞の7つである。笛や太鼓の演奏とともに神楽の曲目が進行し④搔湯になると、神楽方の神官が釜に移動し、御幣の串を釜に入れ、湯を搔き回す。このとき、釜の中央に湯花が立ち、大きな湯花が立つと吉兆であるとされている。⑥湯座では、笹の手房を湯に浸し、参列者に湯しぶきを振りかけて祓う。神楽の終了後には、お釜の湯を飲んで無病息災を祈願するのが古来の習慣である。



湯立のための山



境内に灯されるあんどん



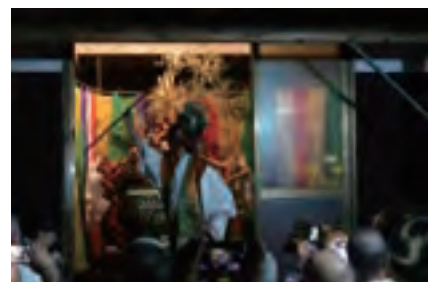
三ツ目神楽 ①羽能（はのう）



三ツ目神楽 ④搔湯（かきゆ）



三ツ目神楽 ⑥湯座（ゆぐら）



三ツ目神楽 ⑦劔舞（けんまい）



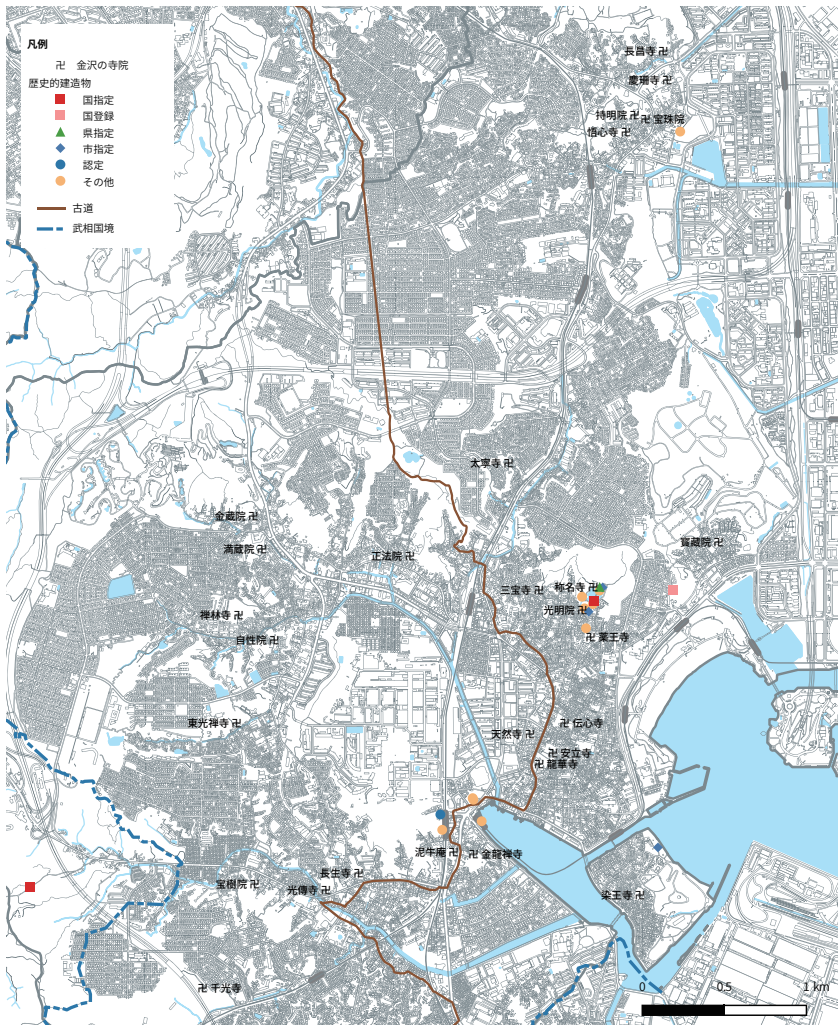




## ○花まつり（稚児行列）

お釈迦様の誕生を祝い、子供たちの健やかな成長を祈る「花まつり稚児行列」と呼ばれる行事は、金沢区内の富岡地区、六浦地区、金沢地区、釜利谷地区の4地区の各寺院が持ち回りで開催している。主催は、金沢区佛教会と金沢区釈尊奉讃会で、毎年4月8日に近い日曜日に開催されている。雅な衣装を身に着けた稚児たちは出発地の寺院から保護者に手を引かれながらゆっくりとにぎやかに街中を歩き、ゴールの寺院に向かう。到着した寺院では、稚児らとともに寺院本堂で法要が執り行われる。境内は花まつりの飾りがつけられ、華やかな花御堂などもかわいらしい稚児らとともに見物客や参拝者の目を楽しませる。

花まつり稚児行列は、戦前は各地域で行われていたが、戦後に現在の形で開催するようになり、昭和22年（1947）に第1回が実施された。令和6年（2024）4月7日には第78回花まつり稚児行列が行われ、金沢の春の風物詩となっている。



称名寺及び金沢の寺院の位置図



花まつり稚児行列



花まつり稚児行列



花まつり稚児行列



花まつり稚児行列



## 2) 景勝地「金沢八景」の海・緑との営み

江戸時代から横浜の海岸線には多くの漁村があり、金沢でも漁業は主要な産業のひとつであった。明治16年(1883)に金沢湾に海苔養殖場ができると、富岡から野島にかけての金沢一帯で海苔の養殖が盛んになった。また金沢の海岸部には、江戸時代から多くの塩田があり、生産された塩は各地に販売された。

中世から知られていた金沢の風光明媚な景観は、江戸時代になると、中国の「瀟湘八景」に見立てた「金沢八景」として成立した。洲崎晴嵐、瀬戸秋月、小泉夜雨、乙舳帰帆、称名晩鐘、平潟落雁、野島夕照、内川暮雪からなる金沢八景は、歌川広重画《金沢八景》をはじめ多くの浮世絵に描かれることで、庶民に広く親しまれるようになり、金沢は江戸の文人たちが遊覧に訪れる観光地となった。

明治時代になると、金沢は東京近郊の海浜別荘地として好まれるようになり、なかでも富岡には多くの政治家や文人たちが別荘を構えた。明治33年(1900)に逗子と金沢をむすぶ池子道路が開通するまでは、横浜から金沢への交通手段として船を利用する人が多く、風光明媚な海岸線の美しさは多くの人を魅了した。太政大臣を務めた三条実美は、富岡東2丁目の海岸に別荘「富岡海荘」を所有し、自身の別荘を中心に、本牧から横須賀の観音崎にいたる海岸線を、日本画家の荒木寛畝に絵巻《富岡海荘図巻》(明治21年、横浜開港資料館所蔵)として描かせている。そのほか松方正義や井上馨、大鳥圭介などの明治政府の要人たちや日本画家の川合玉堂が、富岡に別荘を構えていた。

富岡の地以外では、初代総理大臣伊藤博文の別邸が知られている。明治20年(1887)、伊藤博文は大日本帝国憲法の草案づくりを金沢でおこなうために、陸軍の夏島砲台建設用地を借りて、別邸を構えた。伊藤はこの夏島別邸から洲崎の料亭「東屋」に通い、金子堅太郎、伊東巳代治、井上毅らと憲法草案の検討を重ねた。その後、夏島別邸は小田原に設けた別邸「滄浪閣」に移築し、明治31年(1898)に、洲崎(野島)に茅葺き屋根の金沢別邸を構えた。この金沢別邸には、皇太子時代の大正天皇や韓国皇太子らが訪れており、現在は野島公園内で、旧伊藤博文金沢別邸(市指定有形文化財)として公開・活用され、現在も情緒ある景観と相まって当時の暮らしの様相を来訪者が体感することができる。

景勝地としての次なる発展の契機は、大正12年(1923)の関東大震災であった。震災後、横浜駅をターミナルとした私鉄の鉄道網が形成される。昭和5年(1930)には、湘南電鉄(現在の京急電鉄)が黄金町から浦賀まで開通し、さらに昭和8年(1933)には、品川―浦賀間で京浜電鉄(現在の京急電鉄)との相互乗り入れが実現し、品川から横浜を経由して横須賀、浦賀までが鉄道でつながった。これに



すさきのせいらん  
洲崎晴嵐



せとのしゅうげつ  
瀬戸秋月



こずみのやう  
小泉夜雨



おつとものきはん  
乙舳帰帆



しょうみょうのぼんしょう  
称名晩鐘



ひらかたのらくがん  
平潟落雁



のじまのせきしょう  
野島夕照



うちかわのほせつ  
内川暮雪

歌川広重画《金沢八景》



より、東京から金沢までは日帰りの圏内となり、金沢は海水浴や潮干狩りなどの行楽客で賑わうようになった。また長浜では、横須賀市長浦に存在した旧長浦検疫所から移転した長濱検疫所が明治29年(1896)に設置された。当施設は、天然好風景の地を撰みて海に隣接して設立されたとされ、コレラ等の流行への対策で横浜へ渡航する船舶に対し検査が行われ、感染の疑いがある者は本検疫施設の停留所等に停留した。かつて野口英世が検疫医官補として勤務した経過や、一合停留所には与謝野鉄幹・晶子夫妻、後藤新平などが訪問した歴史がある。現在は旧長濱検疫所一号停留所、同旧細菌検査室、同旧事務棟が残り、来訪者が当時の緑豊かな環境に触れることができる。

昭和5年(1930)、湘南電鉄の開通にあわせて、割烹旅館の金沢園が開業した。大正5年(1916)に横浜で創業した料亭「満月」を前身とする金沢園では、約5万坪の広大な園地に桜1万2千株が植えられ、四季折々の木々を愛でながら、海水浴や潮干狩り、ボートや釣りなどを楽しむことができた。金沢のあらたな観光拠点となった同園には、当時、与謝野晶子や高浜虚子らの文人が訪れている。建物は木造二階建て、入母屋造瓦葺の近代和風建築で、平成16年(2004)に国登録有形文化財となった。現在も「カフェ金沢園」として営業し、当時と同様の趣ある情緒を体感することができる。



金澤園

海とともにあった景勝地金沢のすがたは、戦後になって大きく変化した。昭和40年(1965)に、横浜市の新しい都市づくり構想である六大事業が発表され、その一つとして「金沢地先埋立」が掲げられた。都心部の中小工場の移転先用地として埋め立てられることになった金沢では、富岡・柴・金沢の各漁業協同組合との交渉を経て、昭和46年(1971)3月に埋立工事が着工された。海水浴客で賑わった富岡海水浴場は、昭和57年(1982)に長浜公園となり、現在では市民の憩いの場となっている。



野島公園から望む  
金沢漁港と海の公園

埋立事業で失われた海岸線に代わっては、「海の公園」が昭和63年(1988)7月にオープンした。あらたに金沢漁港や柴漁港が設けられ、現在も底引き網漁やアナゴ漁が続けられている。柴では「海の公園」の沖合いで冬場の海苔づくりがおこなわれており、その様子は、野島公園内の旧伊藤博文金沢別邸からも望むことができる。

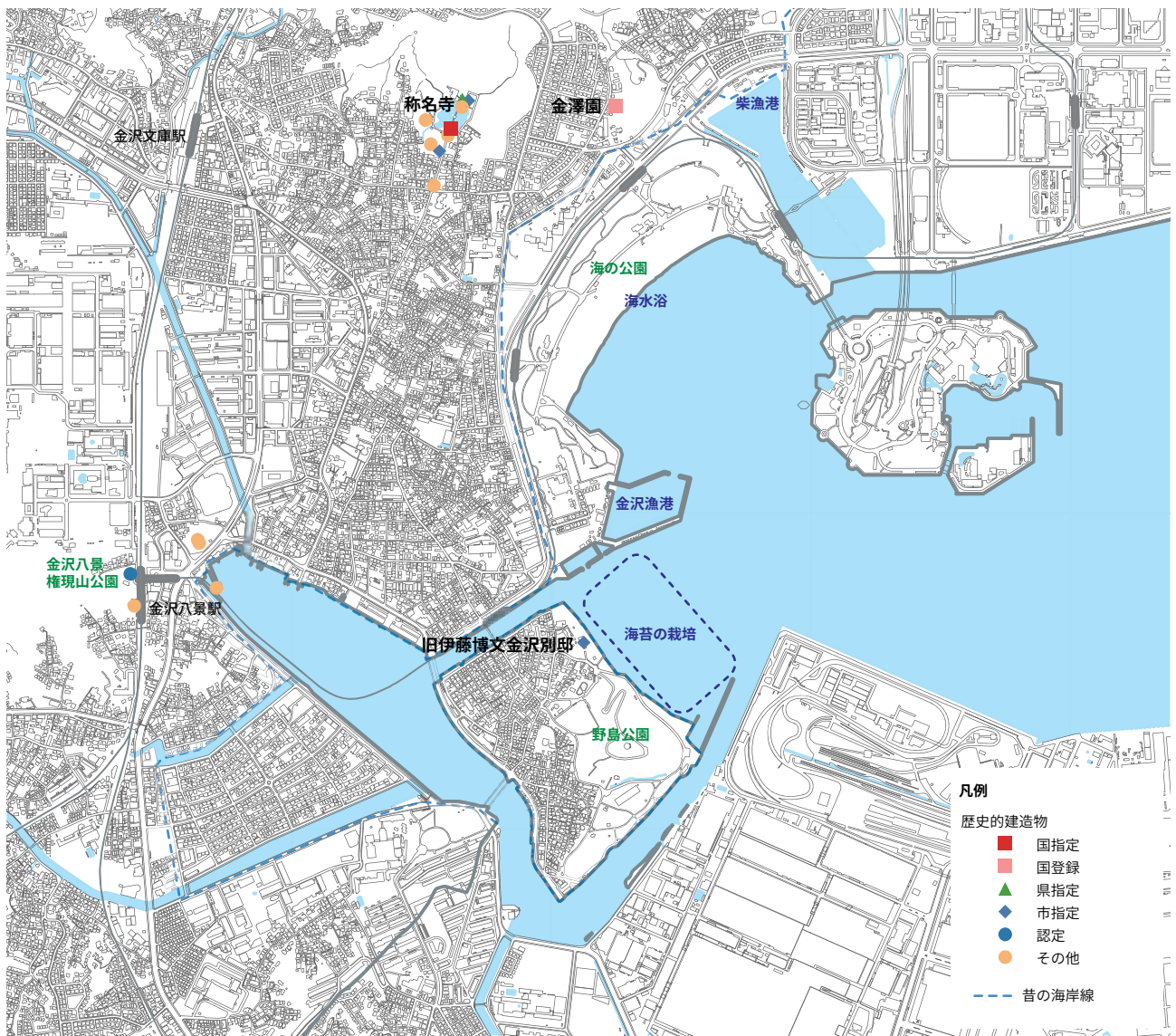


海の公園

現在、自然の海岸線は野島海岸にわずか残されるだけであるが、海の公園や野島公園をはじめ、金沢は海のレジャーで訪れる人気のスポットであり、季節になると、釣りや潮干狩りを楽しむ人々でおおいに賑わっており、金沢の地ならではの海の雰囲気を感じることができる。また、野島公園や金澤園、旧長濱検疫所などに残る歴史資産では、その多くが公開され、海や緑豊かな環境と共にある情緒を現在も体感することができる。



旧伊藤博文金沢別邸からみえる  
のりひび



景勝地「金沢八景」の海・緑との営みの位置図

## エ まとめ

鎌倉時代から発展してきた金沢では、称名寺や朝夷奈切通など中世の歴史を伝える史跡が残る。中世から伝わる祇園船神事や三ツ目神楽などは、地域の大切な伝統行事として受け継がれ、地域の夏の風物時となっている。春に行われる花まつり稚児行列も各地区の持ち回りで開催され、かわいらしい稚児の行列が見物客や参拝者の目を楽しませている。

江戸時代から風光明媚な場所として知られるようになった金沢八景を中心として、別荘地や海水浴の場所として発展していったことを体感できる歴史的建造物や公園などが存在している。戦後は埋め立てにより大きく変化したが、古くから海を望み、海とともにある暮らしは今でも引き継がれ、その情緒を体感することができる。





六浦湊を発祥とする海との暮らしにみる歴史的風致の範囲